

二〇一三年度 卒業論文

浄土真宗における伝道

L100021

正親一宣

目次

序論	1
本論	2
第一章 親鸞の生涯と伝道方法	2
第一節 親鸞の生涯	2
第二節 親鸞の伝道	6
第二章 蓮如の生涯と伝道方法	9
第一節 蓮如の生涯	9
第二節 蓮如の伝道	12
第三章 現代における伝道	17
第一節 日本人における仏教観	17
第二節 現代の僧侶	19
第三節 現代における真宗伝道のあり方	21
結論	24
参考文献	

序論

現代の日本人は過去と比較して宗教への関心が低下している様に感じる。現代の世の中において「宗教離れ」や「寺離れ」といった言葉をしばしば耳にする点からこのような現状があることが推測できる。また筆者の実家が寺院であり、自坊の様子として参拝者数の低下や参拝者の年齢層が高齢者を中心としているといった点からも日本人が宗教から離れていっていることが見受けられる。宗教から離れていっていることには様々な理由があるだろう。その一つとして伝道方法もあげられるのではないだろうか。未信仰者に真宗法義を伝えることはかなり困難なことであるように思える。しかし現代に至るまで、真宗の教義が伝えられてきたという事実がある。私たちは現代社会において、現代人の宗教的ニーズとはどのようなものであるか、新しい伝道の形とはどのようなものが良いのかなどを検討する必要がある。そこで、筆者は浄土真宗における伝道方法が現代においてどのようなものが良いのか、またそれと共に僧侶はどのようなようにあるべきなのかを考察したいと考えた。

この題目を選んだ理由としては、筆者は龍谷大学実践真宗学研究所への進学が内定している。この研究科において布教伝道の方法について学びたいと考えている。布教伝道の研究をする前に過去の伝道方法について学びたい、また一念仏者として現代の社会にどのようにアプローチしていくのが良いのかを進学前に自分なりに考えたいと思いこの題目を選択した。

本論考の目的としては、過去の伝道方法をふまえた上で、現代においてどのような伝道方法がふさわしいのか、過去の伝道からどのようなものが現代に生かすことが出来るのか、また僧侶はどのようにあるべきなのかを考察

することである。

本稿では、まず第一章において宗祖である親鸞について触れる。親鸞の生涯をおさえた上で親鸞の伝道方法について探る。次の第二章においては本願寺教団の拡大を図った蓮如に触れる。蓮如の生涯をおさえた上で蓮如の伝道方法について探る。そして最後の第三章において現代の日本人の宗教観や現代社会の現状をふまえた上で、現代にどのような伝道活動の方法がふさわしいのか、また現代社会における僧侶はどのような姿であるべきなのかを考えてみたい。

本論

第一章 親鸞の生涯と伝道方法

第一節 親鸞の生涯

親鸞（一一七三～一二六二）は承安三年（一一七三）五月二日に京都の南にある日野の里にて誕生した。藤原氏の支流である日野家で、父親は日野有範であった。母親は吉光女であったと伝えられているが、それを示す確かな資料は発見されていない。治承五年（一一八二）の九歳の春に伯父である日野範綱に連れられて、慈円（慈鎮）和尚を戒師として出家し、その後は比叡山に登って二十年間修行をした。比叡山では、常行三昧堂で不断念仏を修行する僧侶である堂僧として止観業を修行していた。

修行を続ける中、二九歳のときに自分自身の居場所に悩み苦しみだした。今の自分自身を見つめ、「このまま

比叡山で修行していいのだろうか」と仏道と自分のあり方を凝視すればするほど、本当の仏道を求めずにはいられなかった。どうしても落ち着くことができなかった日々が続く中、ついに比叡山を下山することを決意し、以前から培われていた聖徳太子への敬意から六角堂に百日参籠して、これからの自分の進むべき道を探し求めている。百日参籠を始めて九五日目の暁に聖徳太子の示現の文を得た。

その後、法然のもとを訪ねた。今まで修行してきた仏道とは違う念仏の教えを自分自身で納得するには、親鸞には時間が必要であった。法然が説く念仏の教えを百日間聞き続けて、ようやく念仏の教えを生きる支えとして受け入れることができたのであった。すぐに弟子入りをして法然のもとで念仏の教えを学んだというのではなく、今まで修行し求めてきた道との違いを悩み考えながらやっと自分の生きる道を見つけていることができ、弟子入りしたのである。

充実した生活を送っていた親鸞であったが、建永二年（一二〇七）二月に承元の法難が起きた。これによって法然の専修念仏教団は解散させられ、法然は四国へ、親鸞は越後の国へと流罪になった。覚如の『御伝鈔』の上巻第三段に、

そもそも、また大師聖人源空もし流刑に処せられたまはずは、われまた配所におもむかんや。もしわれ配処におもむかずんば、なによりてか辺鄙の群類を化せん。これなほ師教の恩致なり。

『浄土真宗聖典（註釈版第二版）』以下、『註釈版』と略す―一〇四五頁）と述べられていることから、このときの親鸞ははまだ念仏の教えを知らない地方の人々にその教えを伝えること

ができるという希望にもえていたように考えられる。

建暦元年（一一二一）の十一月十七日に流罪を赦免される。覚如の『拾遺古徳伝絵詞』の第九卷七段に、

善信聖人も勅免のうへは、やがて帰京あるべきにてはんべりけるほどに、聖人入洛のちいくばくならずしてのち入滅のよしきこえければ、古京にかへりてもなにかせん、しかじ師訓をひろめて滅後の化儀をたすけんにとはとて、いそぎものぼりたまはず、
（『真宗聖教全書 三 歴代部』七六五頁）

と流罪赦免後の行動が記されている。法然は流罪赦免の二カ月後に亡くなった。法然が亡くなったことを聞いた親鸞は、京都に帰ることを諦めて越後にしばらくとどまり、念仏の教えをひろめた。越後での門弟は覚善一人であった。

そして三年後の四二歳の頃、越後から関東へと向かった。関東へと向かう道中、信濃にある善光寺の勸進聖となって活動していたという説もある。勸進聖とは衆生救済のために全国各地を歩きながら念仏の教えを広める僧のことである。

親鸞は関東の地において、およそ二十年間の伝道教化の生活を送られた。覚如の『御伝鈔』の下巻第二段によると親鸞は「笠間郡稲田郷といふところ」（『註釈版』一〇五四頁）に草庵を結んだとされている。草庵跡の現在の場所は茨城県笠間市稲田にある西念寺であるというのが通説である。関東においては六十人を超える門弟がいたことが知られている。門弟の職業は武士・農民・商人などと様々であり、これらの人々は在俗のままの生活をしてきた。この中には常陸在住の門弟数が圧倒的に多く、常陸を中心としながら、下総や下野に教化が及んでい

たことがわかる。親鸞のおよそ二十年間にもおよぶ伝道教化の生活によって、関東には高田門徒・横曾根門徒・荒木門徒などの念仏者集団が誕生した。また親鸞は関東の地において『頭浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』と略す）の執筆を開始している。

親鸞は建保二年（一二一四）の六二、三歳のころに京都へ帰った。帰京後十年ほどは『教行信証』を完成させることに時間を費やしていた。帰京後の門弟は実弟を含めた八人である。また七五歳から八八歳にかけて十四年間に三十数部を著している。これらのことから親鸞は、当時の人々のことだけを考えるのではなく、後世のために念仏の教えをどうしてもまとめおきたいと考えていたのではないかと考えられる。また門弟への手紙である「御消息」が多く残っている。この手紙はほとんどが七九歳以後のものである。

親鸞は京都へ帰った後、関東の門弟たちの間で起きた教えの上での疑問については、門弟たちが京都を訪れるか書簡の往復によって教えを伝えていた。現在とは違い京都と関東との往復には日数も費用もかかるため、急なことには間に合わないこともあった。また門弟たちの間で親鸞の教えについての受け止めかたの違いもあり、それによって争いも生じた。そこで親鸞は長子の慈信房を関東につかわして争いとどめさせ、親鸞の教えを詳しく伝えさせようとした。しかし慈信房は親鸞の教えと異なったものを説き、混乱を加えた。親鸞もはじめは慈信房が自分の教えを正しく伝えていると考えていたようであるが、後に詳しい事情を知って、慈信房と義絶した。

弘長二年（一二六三）、親鸞は九十歳で亡くなった。その時の様子について『御伝鈔』の下巻第六段には、

聖人（親鸞）弘長二歳壬戌仲冬下旬の候より、いささか不例の気まします。それよりこのかた、口に世事を

まじへず、ただ仏恩のふかきことをのぶ。声に余言をあらはさず、もつばら称名たゆることなし。しかうしておなじき第八日午時頭北面西右脇に臥したまひて、つひに念仏の息たえをはりぬ。『註釈版』一〇五九頁）と記されており、最後まで念仏をよるこんで生涯を閉じた親鸞の様子がうかがえる。

第二節 親鸞の伝道

第一節に記した親鸞の生涯から、親鸞は関東に移住する頃から最も盛んに伝道活動を行ったと考えられる。関東における伝道活動の具体的な様子を示した文献である、恵信尼の記した『恵信尼消息』の第三通には、

善信の御房（親鸞）、寛喜三年四月十四日午の時ばかりより、かざ心地すこしおぼえて、その夕さりより臥して、大事におはしますに、腰・膝をも打たせず、てんせい、看病人をもよせず、ただ音もせずして臥しておはしませば、御身をさぐれば、あたたかなること火のごとし。頭のうたせたまふこともなのめならず。

さて臥して四日と申すあか月、くるしきに、「まはさてあらん」と仰せらるれば、「なにのごとぞ、たはごととかや申すことか」と申せば、「たはごとにてもなし。臥して二日と申す日より、『大経』をよむことひまもなし。たまたま目をふさげば、経の文字の一字も残らず、きららかにつぶさにみゆるなり。さてこれこそころえぬことなれ。念仏の信心よりほかには、なにごとか心にかかるべきと思ひて、よくよく案じてみれば、この十七八年がそのかみ、げにげにしく三部経を千部よみて、すざう利益のためにとて、よみはじめてありしを、これはなにのごとぞ、〈自信教人信 難中転更難〉（礼讃 六七六）とて、みづから信じ、人を教へて信

ぜしむること、まことの仏恩を報ひたてまつるものと信じながら、名号のほかにはなにごとの不足にて、かならず経をよまんとするやと思ひかへして、よまざりしことの、さればなほもすこし残るところのありけるや。人の執心、自力のしんは、よくよく思慮あるべしとおもひなしてのちは、経をよむことはとどまりぬ。

さて臥して四日と申すあか月、(まはさてあらん)とは申すなり」と仰せられて、やがて汗垂りて、よくならせたまひて候ひしなり。
(『註釈版』八一五・八一七頁)

とあり、この文から親鸞が衆生のことを非常に考えていたことや親鸞が布教活動を行っていた際の苦悩が読み取れる。伝道布教とは一般的に、まず求道心が起こり、求道による獲信の後、もしくは獲信のなかで伝道が行われるというものである。親鸞の伝道の本質は「自信教人信」であった。「自信教人信」が現れる代表的な文として『教行信証』の「信文類」に、

仏世はなほだ値ひがたし。人、智慧あること難し。たまたま希有の法を聞くこと、これまたもつとも難しとす。みづから信じ、人を教へて信ぜしむること、難きがなかにうたまた難し。大悲弘くあまねく化する、まことに仏恩を報ずるになる
(『註釈版』二六〇・二六一頁)

があげられる。これは善導の『往生礼讃』の引文である。仏が出現されている時に生れあわせること、人が信心の智慧を得ることを難しいことであるとして、そのうえにすぐれた尊い法を聞くことはさらに難しいことであるとした。自ら信じ人を信じさせることは、難しい中でも特に難しいとある。阿弥陀仏の大いなる慈悲によって広く人々を教え導くことは、まことに仏の恩に報いることになる。しかし、衆生利益が念仏だ

けで良いのかという親鸞の悩みもあったようである。笠原一男氏は『親鸞と東国農民』に、

親鸞にとつて、往生の道は、ただ念佛の信心より他はなにもないという立場であつたのである。しかし、それが現實の布教生活の場にたつた時、本願一つに頼りきれず、なお「執心自力のしん」がおこり、念佛一つによる「教人信」＝布教の立場に不安を感じたのであつた。親鸞は、論理として、思想としては、本願への念佛爲本を明確に理解し、それを疑うことなくひたむきに信じたつもりでも、教人信の場において、絶えず、念佛だけでよいのだろうかという執心自力の心が残り、不安が親鸞をおそつたのであつた。その結果、衆生利益のためにとつて三部経千部讀誦の助業を念佛にそえなければならなかつたのである。（一六一頁）と述べている。このような点からも親鸞が衆生のことを考えていたことがうかがえる。

茨城県内には親鸞が遊行念佛聖であつたとわかる場所は多く存在する。それは西念寺だけではなく、広い範囲に見受けられる。親鸞は地元に住む住民たちに念仏の教えを説き、遠出をしながら教化活動をしていたのである。今井雅晴氏は親鸞がどのように教化活動を行つていたのかを『親鸞の風景』に、

朝、稲田草庵を出発して夕方目的地に到着、夜に念仏の会を開き、翌朝稲田に向かつて帰る。親鸞は、遠出の布教活動をするときには、このような一泊二日の行程で行つていたと推測される。（一六頁）

と述べている。ここから親鸞は稲田草庵に訪れる人だけではなく、遠方の人々にも親鸞自身が出向くことで布教活動をしていたことがわかる。このようにして親鸞は稲田草庵を中心として常陸国全土に足を運び念仏の教えを広めていたのである。

第二章 蓮如の生涯と伝道方法

第一節 蓮如の生涯

蓮如（一四一五～一四九九）の生きた室町時代は、社会構造の変革が進み、一方で大干ばつや大地震などの天災、飢饉や疫病などの社会不安が広がっていた時代であり、土一揆も頻繁に起こっていた。世の中の有様や生きることによって不安を抱く中で、人々は懸命に生きようとし、その中で民衆は自らの存在理由を問い、また自ら切り開かなければならなかった。頻繁に起こった土一揆はその現れである。そして民衆は自分たちの力に目覚めた、このような波乱の時代であった。

蓮如は、応永二二年（一四一五）二月二五日に東山大谷において、本願寺第七代宗主存如の長男として誕生した。生母は存如に仕える女性であったと伝えられているが、どのような立場や身分であったかは伝えられていない。記録が残されていないところから身分は低かったと考えられる。このような境遇の中に誕生した蓮如は、長子ではあったが周囲の人々から祝福されるものではなかった。

十五歳になった蓮如の目には世の中の荒れた様子が見えてきた。全国を襲った飢饉により、流民が続々と京都へ押し寄せ、また急速な貨幣経済の中で苦しむ農民たちが各地で土一揆を起こしていた。乱世の苦しみの中、親鸞の高弟が創建した下野の高田派専修寺、京都渋谷の仏光寺、越前の三門徒派の寺院に多くの人々が押し寄せていた。また法然門下の浄土宗各派も盛んであった。しかし本願寺は、親鸞の血脈を受け継ぎながらも寂れていた。蓮如は苦しみ悩む人々が浄土各派に救いを求めようとする姿に、言い知れない思いを抱き、親鸞の教えの継承と

一宗の興隆を決意した。

永享三年（一四三一）の蓮如が十七歳のとき、青蓮院にて得度をした。蓮如がよく通い学んだのは、覚如の長男である存覚ゆかりの寺院である常楽台であった。常楽台において蓮如が学んだとされるものは、親鸞の『教行信証』をはじめ、覚如の『執持鈔』『口伝鈔』『改邪鈔』『教行信証』の注釈書である存覚の『六要鈔』、浄土異流西山派の書物で、本願寺では異端の書とされていた著者不明の『安心決定鈔』などであった。特に『安心決定鈔』は、蓮如が生涯を通じて愛読し、蓮如以降本願寺の聖教となったものである。蓮如は聖教をひたすら読み、書写していた。蓮如は一宗興隆の決意のもと、貧しい中ひたすら浄土真宗の教えの研究に打ち込んだ。

蓮如は二七歳のとき、平貞房の娘である如了と結婚した。それから長男である順如をはじめとし、七人の子どもを授かった。生活は苦しく、次々に誕生する子どもたちを育てることに頭を悩ませた結果、順如を除いては大寺の渴食や里子などに出さざるをえなかった。生計を立てるといふ俗世の煩惱に苦しめられる日々を過ごしていたのであった。そのころの様子を『蓮淳記』は、「父存如の元から届く食事も粗末なもので、ときには一人分しかなくそれを水で薄めて親子三人で分け合った。」と伝えている。しかし、このような生活からの実感と世間への敏感な感覚こそが、後の蓮如の民衆への強力な説得力を培った。『空善記』によると「自分は御門徒に養われている」と語ったという。この時代の苦難が生活者としての姿勢を植え付けたといえるだろう。このような中で自分自身が生きていくための日々の苦勞や喜びを民衆と共有できる宗教家が育っていったのである。

長祿元年（一四五七）、蓮如四三歳の六月、教線拡大を果たそうとして様々な手を尽くしていた父親の存如が

六二歳で亡くなった。蓮如は応玄との後継者争いの末勝利し、本願寺第八代留守識の地位に就いたものの、応玄が本願寺の財産をすべて持って加賀の大杉谷へと退去したため、裸一貫からの出発となった。第八代留守識となつた蓮如は画期的な布教活動を開始していく。

寛正二年（一四六一）三月の蓮如四七歳のとき、近江の門徒衆に向けて初めての『御文章』を發した。親鸞の教えの本質ともいえる阿弥陀仏の本願を、そして平生業成を平易な文章で説いた。この『御文章』による伝道教化は、教団の組織化と布教の両面で大きな成果をあげた。

また布教の効果的な方法として、当時村や町に登場していた「惣」や「座」の長老などを教化せよとしていた。村々などで教化したいのは僧侶と年老と長とし、この三人が信じればあとの人々は安心して彼らに従うとした。地方の組織を知りぬいた教化方法が実行されていたのである。

また親鸞以来本願寺教団は社会的に身分が低いとされた商人や漁民、馬借たちを積極的に教化の対象としていたが、蓮如の時代になると彼らは社会の表に台頭してきた。貨幣経済の浸透に伴い、彼らは取引や流通の担い手となり、全国各地への情報網をもつたのである。蓮如は彼らと積極的に交流した。『御文章』の發布が広く行われ、各地から名号などの謝金が届けられたのは彼らの流通ネットワークの手助けがあったと考えられる。

文明十五年（一四八三）、蓮如六九歳のときに山科本願寺が完成した。数百坪の大谷廟所から立ち上がった蓮如は、二十数年を経て寺域四十万坪を超える巨大な山科本願寺を率いるまでになったのであった。このときの蓮如はおおごることなく、門徒が来たときにはもてなし、夜遅い対面にも厭わなかった。過去の苦勞が活かされていた。

明応八年（一四九九）三月二五日正午、実如をはじめとした多くの人々に見取られながら静かに臨終を迎えた。激動の時代を生き抜いた蓮如は往生浄土を説き、民衆の精神的な支柱となっていた。

蓮如は親鸞の教えの「一念発起平生業成」をより多くの人々に伝えるということが十五歳のときに決意した悲願であった。そして生涯を通し宗祖を敬愛し、その教えを伝えようとした。戦国という時代に親鸞の教える「このころの救済」を説いた。親鸞の教えのなかの「時代を超えた普遍性」を学び、独自の布教活動を創出して教団の拡大に成功したのであった。

第二節 蓮如の伝道

第一節において記した蓮如の生涯から、留守職継職後からが蓮如の伝道活動が活発に行われた時期であると考えられる。

蓮如の悲願は、本願寺教団の正宗を再興することであった。悲願の根底をなすもの、すなわち伝道教化の最も重要な点となるものは、親鸞の心を受け継いで、それを時代の人々に明らかにすることであった。『御文章』の二帖八通には、

それ、当流親鸞聖人のをしへたまへるところの他力信心のおもむきといふは、なにのやうもなく、わが身はあさましき罪ふかき身ぞとおもひて、弥陀如来を一心一向にたのみたてまつりて、もろもろの雑行をすてて専修専念なれば、かならず遍照の光明のなかに摂め取られまゐらするなり。これまことにわれらが往生の決

定するすがたなり。このうへになほこころうべきやうは、一心一向に弥陀に帰命する一念の信心によりて、はや往生治定のうへには、行住坐臥に口に申さんところの称名は、弥陀如来のわれらが往生をやすく定めたまへる大悲の御恩を報尽の念仏なりとこころうべきなり。これすなはち当流の信心を決定したる人といふべきなり。

〔註釈版〕一一二二頁

とある。蓮如の根本には、親鸞の教えに基づいて信心を得る身となるようにということがあった。つまり、親鸞の全てを受け継いで、世の中に伝えるということが、蓮如の願いであったのである。また『蓮如上人御一代記聞書』（以下、『聞書』と略す）の第一五九条に「なにごともなにごともしらぬことをも、開山のめされ候ふやうに御沙汰候ふと仰せられ候ふ」（『註釈版』一一八一頁）と記されている。蓮如はどんな事柄も、わけを知らなくとも親鸞がしたように処理をしているという。

親鸞の宗風というのは「信心為本」、つまり信心を根本とすることであるから、『御文章』のなかでも一番強調している。五帖十通においては、

聖人（親鸞）一流の御勸化のおもむきは、信心をもつて本とせられ候ふ。そのゆゑは、もろもろの雜行をなげすめて、一心に弥陀に帰命すれば、不可思議の願力として、仏のかたより往生は治定せしめたまふ。その位を「一念發起入正定之聚」（論註・上意）とも釈し、そのうへの称名念仏は、如来わが往生を定めたまひし御恩報尽の念仏とこころうべきなり。

〔註釈版〕一一九六、一一九七頁

と記されており、蓮如の「信心為本」の受け止め方を端的にわかりやすく述べている。信心をもつて本とすると

いう親鸞のこころを蓮如は、その当時の言葉を駆使して、わかりやすく人々に解き明かそうとした。第一章において述べたように、親鸞は自分だけが信心を得るのではなく、自分以外の周りの多くの人々にも信心を得させるようにと願って、善導大師の『往生礼讃』の「自信教人信」の言葉を使って示した。自ら信じ人をして信ぜしめるといふ、これこそが「信心為本」の本当の意味であると繰り返し強調している。だから蓮如は、人にも信心を得させるようにすることが大切であるとして、伝道教化の方法として、教えの内容は民衆にしたがって平易化していくべきだということを強調しているのである。

また蓮如は法談、つまり仏法について語り合う方法を勧めた。そのひとつは説教である。説教を聞いた人々はどうのように自分自身が受け止めたかを打ち明けて、その受け止め方を語った。さらに蓮如は、人々が自分の至らない身の振る舞いを懺悔したり、信心の受け止め方を反省したりするための「寄合談合」という形式を発案した。いずれも仏法について談話をする法談である。蓮如の言葉によると、法談とは仏法を讃嘆することだという。お経のこころ、あるいは仏の慈悲を褒め称えるのが仏法を語ることだと語っている。そしてその場合の心得を『聞書』の第一八五条に、

仏法をばさしよせていへいと仰せられ候ふ。法敬に対し仰せられ候ふ。信心・安心といへば、愚痴のものは文字もしらぬなり。信心・安心などといへば、別のやうにも思ふなり。ただ凡夫の仏に成ることををしふべし。後生たすけたまへと弥陀をたのめといふべし。なにたる愚痴の衆生なりとも、聞きて信をとるべし。当流には、これよりほかの法門はなきなりと仰せられ候ふ。

（『註釈版』一二八九頁）

と述べている。蓮如は、文字を知らない門徒衆に対しては、手短にわかりやすく語るべきであるとした。その教えの中心が「後生たすけたまへと弥陀にたのめ」ということであつて、「凡夫が仏になる」ということが最も重要な点であるとしていた。

法談の一形式として、「聖教読み」というものが行われていた。聖教つまり仏典を人々に読み聞かせるのである。この方が法話をするよりも教えが正確に伝わるということであつた。しかしこれは逆を言えば、信心を得ていない者がただ聖教を人々に読み聞かせることになりかねない。信心を得ていない人がいくら聖教を読もうと信心を得る人は生まれないのである。『聞書』の第九四条には、

聖教よみの聖教よまずあり、聖教よまずの聖教よみあり。一文字をもしらねども、人に聖教をよませ聴聞させて信をとらすは、聖教よまずの聖教よみなり。聖教をばよめども、真実によみもせず法義もなきは、聖教よみの聖教よまずなりと仰せられ候ふ。

（『註釈版』一二六一・一二六二頁）

とある。「聖教よみの聖教よまず」が一番悪く、信をとらせることこそが、本当の聖教読みだとしている。これと同じで「御文読み」がある。『御文章』を法座のときに読ませるもので、これは蓮如自身が、堺の寺にいたときに発案したと述べている。

法話のあとの寄合談合という形式を蓮如は広く勧めた。法話を聞いても、それを聞き違いしてはならないとして寄合談合を勧めたのである。寄合談合の留意点として、繰り返し同じことを質問して聞くべきであり、珍しい話を人から聞こうとしてはいけない。同じ法義の話は何度も何度も繰り返し聞いて、信心を得るべきであるとし

た。

また法話の心得として、何でも飽きずに仏法の話に立ち戻るようにすべきであって、談合に集まっている人々の中には、世間話に興じていつ果てるともないという場合があるかもしれないが、そのような場合は一応そのまま世間話を聞いておいて、最後にまた仏法の話に戻るよう努力すべきであった。

談合の形式として蓮如は「同座」を基本にした。これは親鸞の「御同朋御同行」の精神を再現したものと考えられる。これについて蓮如は、しばしば曇鸞の『浄土論註』にある、

同一念佛無別道故、遠通夫四海之内皆為兄弟也
（『真宗聖教全書 一 三經七祖部』三二五頁）

を取り上げている。蓮如は「同一念佛無別道故」という精神は、同一の念仏の味わい、つまり一味の安心に住することであっても、それを具体的にあらわすものが同座としての談合であるという。寄合談合とは、上下の差別なく同じ「平座」で膝を突き合わせて、仏法の法義を語り合うことだとしている。その場合に世間の事柄を語るにしても、仏法を語るにしても、寄合談合に集まっている人に対して、

世間・仏法ともに、人はかるがるとしたるがよきと仰せられ候ふ。黙したるものを御きらひ候ふ。物を申さぬがわるきと仰せられ候ふ。また微音に物を申すをわるしと仰せられ候ふ。
（『註釈版』一三三三頁）

と言ったと『聞書』の第三十一条に記されている。人は嘘やごまかしなく語り合うべきであり、黙っているのはよくないとした。談合のときに何でも打ち明けず言わないこと、小さい声で言うことはいけないとし、心得を細かく教えている。

また『聞書』の第一六六条に、「仏法はしりさうもなきものが知るぞと仰せられ候ふ」（『註釈版』一二八三頁）とあり、仏法に関しては、知りそうもない人が案外知っているから、何でも人に尋ねるべきである。また自分の思っている心中の通り、領解したままを皆で打ち明けるべきである。そして口に出して、はっきり心底を打ち明けるべきである。また気づいて謝るべきものがあつたならば、認めて改め直すべきであるとしている。

このようにすることによって蓮如は、誰もが仏法に触れやすく、また聞き学びやすいような環境をつくりあげた。これらの結果として本願寺教団の拡大に成功することができたのだと考える。

第三章 現代における伝道

第一節 日本人における仏教観

現代において、多くの日本人の宗教観は「無宗教」であると表わされる場合が多い。しかし、阿満利磨氏の『日本人はなぜ無宗教なのか』における考察によると、「無宗教」と言う人々は「宗教心がない」のではなく、「特定の宗派の信者ではない」と述べている。さらに、日本人の宗教は、「融通」と「曖昧さ」に満ちており、「無宗教」が「創唱宗教」の否定ではなく、むしろ「自然宗教」の信奉を意味していると述べている。自然宗教とは、ご先祖を大切にする気持ちや村の鎮守に対する心などから、年間行事に参加することによって、自然発生的に展開した宗教のことである。日本人の宗教心の根底にはこの「自然宗教」があると考えられる。よって、日本人は宗教に関心がないというわけではない。

しかし、日本人が「創唱宗教」に関心があるかどうかとは別である。以前の日本においては、浄土真宗をはじめとする仏教と無関係の暮らしをしていたとしても、仏教の儀礼に従った葬式を行い、死者の供養を法事として行ってきた。だが、近年の日本においてはこのような風潮が変化しつつある。葬式に僧侶が必要でないとして、僧侶不参加の葬式が増えはじめているのである。

現代の日本における仏教の現状として、「葬式仏教」と批判されることがしばしばある。その理由の一つとして、寺院が葬式や法事のみを行っているように見えるという点が挙げられる。さらにその奥には、葬式そのものが形骸化し、人々を納得させるものになっていないということが潜んでいる。また批判される理由のもう一点として、葬式ばかりを行っていて人々の抱える苦悩や社会問題に向き合わないという点が挙げられる。この二点によって「葬式仏教」と批判されているのである。

そもそも仏教は、もともと葬式には関心を示すことがなかった。仏教の目的は「苦」からの解放であるから、釈尊の時代では、人々は出家し、共同生活を行い、その中で戒律を保ち、煩惱と無知の克服に努めた。釈尊は、釈尊が死んだ際にも葬式は在家の者に任せて、出家者は修行に励むようにと説いている。

そのような仏教であったが、中国に入ってから死者の祭祀に大々的に関わるようになった。そこから日本に入ってきて、日本人は死者をいかにして先祖に祀りあげるか、という要求をもって仏教を利用した。阿満俊麿氏の『仏教と日本人』には日本人における仏教について、

死者のタマシイを祖先のタマシイにまで高める祭祀を、仏教の儀礼によって行うこと、である。重要な点は、

仏教の儀礼にあるのではなくて、死者のタマシイを「ご先祖」とよばれる、祖先の霊の集合体（それを民俗学では「祖霊」という）にまで昇華させるという点にある。

このような死者祭祀こそ、日本の「自然宗教」（自然に発生した宗教意識）の中核を形成している。日本人ならば、特定の宗教（「創唱宗教」）の自覚的な信者である場合を除いて、このような死者祭祀におおいに共感するであろう。宗教とは、死者供養、鎮魂慰霊だと思っているくらいだから。（一九四頁）

と述べている。このように現代の日本人にとっての仏教は、葬式が中心であり、教義は飾りでしかないのである。

「葬式仏教」という形態があつたからこそ、日本の仏教は日本全国に浸透することができたとはいえ、本来の生きている自己の生死の問題を解決するという、仏教の根本的趣旨が失われがちになっていることは好ましくない状況である。教義が飾りになってしまっている今こそ、教義を学び伝え、教義を通して人々の抱える苦悩や社会問題に向き合うことが必要であると考ええる。

第二節 現代の僧侶

門徒にとって、現代の僧侶とはどのようなものなのであろうか。上田紀行氏の『がんばれ仏教！』に真宗の門徒の方が実際に体験した話として、

どうしてお坊さんは、こっちがよけいに悲しくなるような言動しかないのでしょうか。主人を亡くしまして、

こちらはもうくたくたに看病で疲れて、それでお葬式ですから、葬儀のときにちよつとお坊さんに目が行き届かなかったことがあったんです。そしてそのことをものすごく非難されまして、それで私が謝って謝って、したら『あんたは教養があるから許してやる』って言われたのです。こちらはもう心も体も疲れ切つて、主人を亡くしていますから。そんなときに、俺たちは偉いんだからと、上から見下すような、何であるなことが言えるんでしょうか。

(一六頁)

と記されている。これはあくまでも一例にすぎないがこのような現状は見るに堪えない。親鸞は「御同朋御同行」の精神を掲げ活動していた。これは親鸞の精神に反していると考えられる。僧侶と門徒の関係性として好ましくない。また上田氏は『同書』において、

多くの人は仏教とは口先だけのものだと思っている。ありがたいお言葉だけで、何も行動しない。彼らはこうすればよりよい人生が送れるとか、そういう人が増えればもつといい世の中になるとか説教はするが、別に本当にそういう世の中になってほしいわけでもないに違いない。本当にそうなってほしいなら、もつと別の行動のしかたがあるはずだ。そもそも、現実の世界にもつと憤つてもいいはずだし、本気で行動を起こしていることだろう。しかし、現実の僧侶たちを見ると、そんな考えがあるようにも見えないし、職業だから法事をやっている以上の姿は見えてこない。ありがたい話も生計のための方便なのだろう。

言っていることがいくら良くても、行動がそれに伴わない人間は、口先だけの人間だと言われる。世の中では軽蔑されるタイプの人間だろう。仏教の多くの僧侶は、言っていることもどこかから借りてきたような

「いい話」に過ぎないし、行動も全く伴っていないように多くの人々は感じている。それでは尊敬されるわけもないし、そんな人たちに期待をしろと言うほうが無理な話だろう。

(二八頁)

と述べている。全ての僧侶がこのようであるとは言えないが、あてはまる僧侶もいるだろう。このような状態ではいくら一所懸命に伝道活動を行おうが聞いてもらえないし、伝わらない。伝道活動を行うにあたって、親鸞が掲げていた「自信教人信」や「御同朋御同行」の思い、それらを引き継いでいた蓮如の「同座」の精神を忘れないこと、常日頃から一念仏者として節度ある態度や行動をすることが必要不可欠であると考ええる。

また僧侶はただ葬式を行う、ただ伝道活動を行うだけではなく、社会問題に向き合うことも必要である。現代社会には、無縁社会、自死などといった社会問題も多くある。このような社会問題に対し、積極的に関わっていく行動力が僧侶には必要なのではないだろうか。

第三節 現代における真宗伝道のあり方

現代にふさわしい伝道活動の方法とはどのようなものなのであろうか。

現代における浄土真宗の具体的な伝道活動の種類は、中央仏教学院の『伝道要義』によると、法座伝道、掲示伝道、文書伝道、視聴覚伝道、儀式伝道、出張伝道、一般寺院、本山伝道の八種類があげられている。

現代の社会では、通信技術の発達によりメディアも急速に発達している。それに伴いインターネットも幅広く普及している。このような社会において、先程あげた伝道活動の中にはなかったが、インターネットを使った伝

道活動が有効的に使えるのではないだろうか。

一九九一年に出版された『メディア布教入門』を見ると、メディアを使った伝道に対する関心が高まってきていることがわかる。そこにおいては、具体的な伝道方法があらわされていて、最後に「これからのメディア布教」としてインターネットが紹介されている。

インターネットが幅広く普及していることはデータとしても顕著にあらわれている。総務省の調査によると、利用者数、人口普及率ともに年々増加している。すなわち、インターネットを利用することによってより多くの人々に簡単に伝道活動を行うことができ、寺院と人々との縁が拡大すると考えられる。それによって、今まで仏教に興味がなかった人々にも仏教に興味をもってもらえるきっかけとなるのではないだろうか。

しかし、伝道活動には長所もあれば短所もある。もちろんインターネットを利用した伝道活動にも短所が見受けられるだろう。インターネット上には、膨大な数の情報が流れている。その中から正確な情報を受け取ってもらえず、誤った解釈をされてしまう可能性が出てくる。また実際に寺院に足を運ぶ機会が減少することが考えられる。各寺院がウェブサイトを作成する時代が到来した場合、今日も行われているバーチャル参拝などの手段が増加することによって、実際に寺院に足を運ぶ機会がなくなってしまうのではないか。さらにその門徒は、寺院の維持に対する責任感がなくなり、維持費用のなくなった寺院の経済的基盤は崩れ、空き寺が増加する可能性が考えられる。

インターネットを利用した伝道活動は、時代に対応しており、有効な伝道活動であると考えられる。しかしそれ

上に、僧侶と門徒とが直接顔を合わせて行う伝道活動こそが現代の社会において必要不可欠なのではないだろうか。インターネットを利用することによって、多くの人々と簡単に縁を持つことが出来る。しかし、それによって人と人が直接関わる機会が減少している。さらに孤独を感じる人も増加している。だからこそ、寺院を通して人と人とが直接関わって行う伝道が必要なのではないだろうか。

ここで有効なのが、親鸞が東国布教の際に行っていたような僧侶自らが足を運ぶ伝道活動や蓮如の勧めていた「寄合談合」であると考ええる。

親鸞の行っていたような何らかの事情で寺院に足を運ぶことができない人々に対して、僧侶自らが行動し、寺院の外で伝道活動を行うといった方法を利用すれば、誤った解釈をした人々を減少させることができるのではないだろうか。また僧侶自らが動くといった姿勢によって、僧侶に対して不信感を抱いている人々からのイメージも変えられるのではないだろうか。

「寄合談合」のようなものを行うことによって、人々は仏法をより聞き学ぶことができ、仏教に対しての関心も高まるのではないだろうか。さらに、人と人とが直接関わる機会が増え、一つのコミュニティの場となり、現代の問題となっている孤独の解消にも繋がると考える。

伝道活動を行うにあたって、現代の社会に対応しながら、社会問題にも向き合うといった姿勢が必要となってくると考える。現代に対応したインターネットを利用した伝道活動はあくまでも人々に仏教に関心をもってもらうために、仏教を身近に感じてもらうために使用する一つのツールとして使用し、中心とするのは、昔から存在す

る直接対面して行う伝道活動が良いのではないだろうか。

結論

本論考では、まず第一章において親鸞の生涯を訪ね、東国での伝道方法を考察した。「自信教人信」を伝道の本質として、人々のことを思いながら伝道活動を行っていた親鸞の姿を明らかにした。

次に第二章において蓮如の生涯を訪ね、伝道活動の姿勢や方法について考察した。親鸞の教えに基づき、伝道活動を行っていた蓮如の姿を明らかにした。

最後に第三章において現代における僧侶、伝道方法のあり方について考察した。現状をふまえた上で、これからの伝道のあり方について筆者なりの考えを記してみた。

これらの手順を行い、主題である「浄土真宗における伝道方法」について考察した次第である。現代の日本では、科学技術の発達により、人々が目に見えないものを信じないといった傾向が見受けられる。筆者はこれに危機感を覚える。自分が多くの存在によって生かされているということは目に見えない。しかし、これがまぎれもない事実であると考えている。人は一人では生きていけない。多くの存在によって生かされていること、これを知った上で生きていくべきだと考える。

また世界的にみると日本は非常に裕福であり、物質的には満たされているように感じる。しかし、ここらの問題が非常に多く見受けられる。すなわち、精神的には裕福ではないのである。浄土真宗を通して、人々を精神的

に裕福にし、すべての人々が共に支え合いながら生きていく、そのような社会の形成ができるのではないだろうか。そのためには、まず僧侶自身が社会に必要とされる存在になることが必要である。だからこそ、僧侶は自身自身の行動を振り返り、より良くし、社会の抱える問題の解決に積極的に取り組むことが必要であると考ええる。親鸞や蓮如の姿勢をもとに、伝道活動をしていくのが良いのではないだろうか。筆者自身も一僧侶として自身自身の行動を内省し、「御同朋御同行」の精神のもと、門徒であるかどうかを問わず、すべての人々と共に仏法を聞き学び生きていきたい。また社会問題に対しても一僧侶として真摯に向き合っていきたい。

〈参考文献〉

- 浄土真宗教学研究 浄土真宗聖典編纂委員会編 『顕浄土真実教行証文類（現代語版）』
本願寺出版社 二〇〇〇年
- 村上速水著 『親鸞教義とその背景』 永田文昌堂 一九八七年
- 鎌田宗雲著 『親鸞の生涯と教え』 法蔵館 二〇〇七年
- 笠原一男著 『親鸞と東国農民』 山川出版社 一九五七年
- 今井雅晴著 『親鸞の風景』 茨城新聞社 二〇〇九年
- 今井雅晴著 『親鸞聖人 関東ご旧跡ガイド』 本願寺出版社 二〇一一年
- 早島鏡正著 『蓮如のすべて』 新人物往来社 一九九五年
- 林 智康著 『蓮如教学の研究』 永田文昌堂 一九九八年
- 稲葉昌丸著 『蓮如上人行實』 法蔵館 一九四八年
- 阿満利磨著 『日本人はなぜ無宗教なのか』 筑摩書房 一九九六年
- 阿満利磨著 『仏教と日本人』 筑摩書房 二〇〇七年
- 上田紀行著 『がんばれ仏教！』 日本放送出版協会 二〇〇四年
- 中央仏教学院編 『伝道要義』 本願寺出版社 一九八二年
- 教化フォーラムエ著 『メディア布教入門』 白馬社 一九九一年